

バドミントンのジュニア選手と大学エリート選手の競技開始年齢について

渡辺英次¹, 三島隆章², 油谷浩之³, 野呂進¹, 関一誠⁴

(¹専修大学スポーツ研究所, ²八戸学院大学人間健康学部,

³スマートストレングス, ⁴早稲田大学スポーツ科学学術院)

【目的】 2020年東京オリンピック開催決定に伴い、スポーツの価値、スポーツを通じた社会への貢献や期待が高まっている。良い競技成績を継続して収めるためには競技人口の増加は必須要件の一つである。日本バドミントン協会会員数は平成20年度231,891名、平成24年度は250,501名と年々増加している(日本バドミントン協会, 2013)。また、生涯スポーツとして行われる成人のバドミントン実施人口の推移をみると、2010年では週1回以上104万人、月2回以上156万人、年1回以上は701万人と多くの方が競技を楽しんでいる(笹川スポーツ財団, 2011)。そこで、本研究では生涯スポーツの導入部分ともいえるジュニア選手と、競技スポーツとして今後国際大会での活躍を期待される大学エリート選手の競技開始年齢を調査し、競技力との関係と競技環境を明らかにする目的とした。

【方法】 研究者らのグループが平成20年より行っている「スポーツ選手の体格・運動能力測定」参加者である3歳から15歳までの選手926名(男子390名, 女子536名)、大学エリート選手として関東大学一部リーグに所属し全国大会出場経験を有する18歳から22歳までの選手44名(男子13名, 女子31名)とした。測定実施の際に、記録用紙に指導者、保護者、選手らに競技開始年月の記入をお願いした。統計学的検定には男女差、ジュニアとエリート選手の差について独立したサンプルのt検定を行った。有意水準は5%未満とした。

【結果】 ジュニア選手の競技開始年齢ならびに大学エリート選手の競技開始年齢、検定結果は表1の通りであった。

【考察】 ジュニア選手の多くは小学2~3年生から開始し、男女差がないことから性別に関係なくスポーツの機会を得ていると考えられる。男子エリート選手においては男女間、男子ジュニア選手間で差がみられた。多くのエリート選手が小学生時代から全国大会に出場し、競技開始8~10年の間に中・高で全国大会上位の成績を収めていることから、競技成績と競技年齢をより詳細に追う必要がある。また、生涯スポーツの開始年齢とその動機についての調査報告(渡辺ら, 2005)では、小学生7.1歳、中学生7.9歳、高校生9.5歳、大学生10.4歳であることから、大学生については当時の小中学生が現在の大学生の年代になったため開始年齢が早まり、小中学生に関してはこの10年で大きな変化は見られず、低年齢化も落ち着いている。

【現場への提言】 スポーツ活動開始時期の良好な関係がスポーツの継続につながることから、この時期にかかわる指導者の存在と安全への十分な配慮が必要となる。エリート選手の指導においては競技力向上もさることながら、急発進急停止、捻り動作が多く、肩関節、腰、下肢の

ケガの多い競技であることから、ケガの予防に重点を置いた指導と選手への教育をお願いしたい。

なお、本研究は科研費(23700741)ならびに平成24年度専修大学学内研究助成共同研究の成果の一部であることを付記する。

Table 1. Starting age for badminton

		n	mean	SD	min	max	
junior	men	390	8.1	2.0	3.2	13.8	*
	women	536	8.2	1.9	3.5	13.6	
elite	men	13	6.8	0.8	5.4	8.3	+
	women	31	7.8	1.4	5.4	10.6	

* vs elite men p<0.05, + vs elite women p<0.05